第４回東海村“自分ごと化“会議 議事概要

参加者	会議参加者　15 名
コーディネーター	伊藤伸（一般社団法人 構想日本 総括ディレクター）

■第４回“自分ごと化”会議の進め方等の説明

福島第一原子力発電所等見学に係るアンケート結果（東海村 防災原子力安全課 山路係長）

- 10 年前の福島第一で発生した事故の後，復興に向けた取り組みを実際に御覧いただくことは，“原発問題”について議論を深めていく上では欠かせないと考え，希望者を募って，東海村“自分ごと化”会議参加者による福島第一原子力発電所等見学を，10 月３日（日）に実施した。当日参加者は 14 人だった。
- 見学内容は次のとおり。
  - 水素爆発があった１号機から４号機までの原子炉建屋外観を約 100ｍの位置から間近で見る“俯瞰エリア”からの見学
  - 廃炉に向けて進めている核燃料の安定冷却
  - 原子炉内で溶け落ちた核燃料が冷えて固まった“デブリ”の取り出し
  - 汚染水の発生や放射性廃棄物の保管
  - 汚染水を浄化処理した“ＡＬＰＳ処理水”の保管・海洋放出などに関する説明
- 当日の様子の振り返りとして参加者アンケート結果の一部を紹介する。
- （１）見学しての感想”は，参加者全員が「見学して良かった」と回答した。主な理由は以下のとおり。
  - 当時のままの原発の建物を見る事ができて，あの爆発がどれほどの威力だったのか自分の肌で感じる事ができた。
  - ニュースでは見たことのなかった発電所を見学できてその管理や対処方法等，肌で感じられて良かった。
  - 報道だけでは知りえない状況を見られた。　…など
- （２）（見学した施設や設備の中）興味・関心を持った所”は，「１号機～４号機原子炉建屋外観俯瞰エリア」（11 件）や，「ＡＬＰＳ処理水のサンプル」（10 件）の回答が多かった。主な理由は以下のとおり。

- 事故の現実と目に見えるかたちでの今の工事や当時の設備の様子が見えたから。
- 事故をおこした原発は，これまでも廃炉が完了しているものはない。（チェルノブイリ，スリーマイルなど）各国のやり方は，大きく異なると思うが，各国の英知を結集し，解決していってほしいし，廃炉完了にむけて，ひきつづき努力していってほしい。
- 色々と話題になっているＡＬＰＳ処理水を見ることができた。
- 今後の海洋放出をふまえ，積極的な安全性アピールが必要では。　…など

- （３）福島第一原子力発電所事故の教訓として自分なりに思うこと”に関する主な回答は以下のとおり。
  - 全てを把握し，理解する事は不可能だが，外部に，人に依存しないようにする心構えが重要だと感じた（正に自分ごと化）。
  - 住民の目線では，かなり天災に依るものだと感じる。これも災害ととらえて，防災意識を高めるしかないのかなと思った。
  - “想定外”の事象だと割り切るのではなく，現実的な研究開発と，それを踏まえた想定を正しく行い，必要な対策をつづけていってほしい。ただの“災害”として，すませるのではなく，教訓として他の原発（東海第二も）対策を行い，次にすすめていってほしい。　…など
- （４）見学を通して印象深かったことや感想”に関する主な回答は以下のとおり。
  - １０年前のままで残っているものが多く，まだまだこれから処理が長く続くのを実感した。未知の技術課題が多いと思われるが，着実に進めていってほしい。
  - 少しずつだが，復旧出来ているのが感じられた。
  - 発電所でなく，帰還困難区域の様子に荒れた店舗や，きれいな戸建の家にも住人が住めない景色に心が痛みました。　…など

※詳細は，資料２「東海村“自分ごと化”会議 福島第一原子力発電所等見学者アンケート結果」を御覧ください。

第３回までの振り返りと第４回の進め方（構想日本 伊藤）

- 第３回は，前半に広域避難計画，後半に東海村の特徴を活かしたまちづくりについて議論した。
- これまでの会議で挙がった改善提案を資料５「第３回 東海村“自分ごと化”会議『改善提案シート』」に取りまとめた。
- 課題は大きく２分類。この資料に記載してある内容をもとに議論をするわけではないが，前回までの議論を振り返るために参考に御覧いただきたい。
  - 原発の安全性

① 避難計画・ルートが十分でない（安全に避難できるのか）
② 原発の安全性がまだ分からない

- 今後の まちづくり
  ① 東海村の今後のまちづくりについて議論が足りていない
  ② 原子力に代わる新たな東海村の魅力の創出が必要
  ③ 東海村の特徴と魅力が十分に理解されていない
  ④ 交付金の使い道がまちづくりに活かされていない
  ⑤ 交付金がなくなることを想定した議論がされていない
  ⑥ 原発の廃止とその後について議論がされていない

※課題と改善提案の詳細は，資料５「第３回 東海村“自分ごと化”会議『改善提案シート』」を御覧ください。

- これまでの会議における意見，改善提案，アンケートの結果をもとに，本日のテーマを設定した。
  ① みんなで考える，東海第二発電所が立地していることによる地域の課題は何だろう？
  ② 私にとって，東海第二発電所そのものが抱える課題は何だろう？
- 第１回から第３回は，専門家からの説明を受け，東海第二発電所（以下，東海第二）があることで得られるメリット，原子力関係施設があることを活かしたまちづくりについて議論をしてきた。これまでの議論を踏まえて，地域の課題と自分にとっての東海第二を考える。東海第二の再稼働の是非，原子力発電所（以下，原発）の是非を決める会議ではない。

福島第一原子力発電所等見学の振り返り

伊藤：福島第一原子力発電所（以下，福島第一）見学参加者から，当日の感想を共有いただきたい。

- 10 年前に被災したときのものが，そのままに残っていたことのインパクトが強かった。水素爆発のあった現場をこの目で見られたのは良かった。
- あれだけの大規模事故だったのに，あんなに近くに行けることが衝撃的だった。
  厳戒な管理体制で物々しい，戦闘のような状態をイメージしていた。ここまで復旧したのか，と良い意味で衝撃を受けた。ゴーストタウン化した帰還困難区域を見たときは，生々しさを感じた。貴重な経験になった。
- TV 越しに見るのと，自分の目で見るのは違うと思った。
  帰還困難区域の様子は衝撃的だった。そのままの形で残っている家を見て，住んできた

方の思いを感じとって心に響いた。

伊藤：私も現地に行ったことがあるが，帰還困難区域には，生活の実感がまさにそのまま残っているように感じた。

- あんなに間近で見たのは初めて。もっと殺伐としていると想像していた。一方で、一号機は未だに鉄骨がむき出しになっていたり，見学をしていると線量計のアラームが鳴ったりなど，まだ廃炉の途中だと感じた。
  当日の東京電力からの説明の中では，処理水・トリチウムなどの説明を熱心にされていた。東電の方々も苦労されていると思った。

■協議①：みんなで考える，東海第二発電所が立地していることによる地域の課題は何だろう？

東海第二が立地していることによる地域の課題

- 安全に運転していれば問題ない。東海村で共生できているとは思う。ただ，リスク・安全性については村内で意見が割れている。原発についての議論がしにくく感じる。
- 東海第二があることで，福島第一見学で見た帰還困難区域と東海村が同じ状況になる可能性がある。それをただ怖がるだけでなく「正しく恐れること」が必要だと思った。他人やメディアが言うことに左右されず，自らが知ること・知識を得ることが重要。
- 福島の帰還困難区域に入ったとたんに手元の線量計の数値がどんどん上がっていった。福島へ見学に行ったことで，前よりも「怖い」と感じた。ただその上で「怖いから全てない方がいい」ということではなく，今あるものに対して，何か出来ることはないかを考えていかなければならない。
- 経済的観点から，メリットがあることは分かるが，東海村は原子力に依存し過ぎている。原子力以外の産業について考える必要がある。新たな産業や，農業のブランド化が必要だと思う。例えば農業で、東海村の芋を使った芋焼酎を作ってブランド化するなどの手もあるのではないか。
- 福島第一見学に参加した際、ALPS 処理水を海洋放出することについて，説明を聞いて放出するという判断の根拠が分かり，基準どおりに希釈すれば安全に放出できると思えた。なぜメディアであんなに危険だと取りざたされているのか不思議に感じた。
  福島第一を見た上で，もう一度東海第二について考えてみた。今の私は，東海第二は地域と共存できると考えている。
- 東海第二があることが当たり前で過ごしてきた。特に 3.11 の前はそうだった。
  原発に賛成の人，反対の人，どちらでもない人がいる。「どちらでもない人」を減らしていくことが重要だと思う。
  「どちらでもない人」を減らすためには，個人が色々な情報を受け入れ，自分ごととし

て捉えて，賛成するのか，反対するのかを考えることが大事だと思う。

- 一般的に「原子力」に対するイメージは，興味がないか，嫌悪感があるかのどちらかで，ポジティブではないと思う。そのイメージによって「東海村の物が売れない」「東海村には行きたくない」などの考えが出てきかねないので、そうならないようにしなければいけない。
  私自身がどうかというと，東海村に移り住む前は，とりあえず「原発がある」というイメージがあったが，住んでみると，住みやすいまちだなと感じ，原発があることをあまり感じていない。私は「原発」に対しては，ネガティブでもポジティブでもなく中立の考え。

- 自分は結婚を機に越して来た。東海村のことを特別悪い地域だとは思っていない。
  夫が原子力関係の仕事をしていた。身近に専門的な知識を持っている人がいることで「何となく怖い」ということはなく，「これは大丈夫」「これは影響ない」という説明を受けて安心して暮らしてきた。
  ただ，昨今，事故について色々と言われている。JCO の事故のときにも，風評被害があった。今回，福島第一の事故について改めて考えてみると，自分の家も同じように帰還困難区域になる可能性があるのだなと思った。
  一方で，東海村に新たに家を建てて移り住むする人たちもいる。東海第二について，東海村で生活している中で，私たちは何をメリット・デメリットとして捉え，どういう風に考えていけば良いのか、この会議に参加してからよく考えるようになった。

- 東海第二があることが当たり前だった。だから今回のテーマについては考えず過ごしてきた。こうして自分ごと化会議に参加する前は「無関心」だった。
  無関心ではなくなったものの，何が東海第二の課題でどう解決すれば良いのかを考えるとすぐには思いつかない。では自分に何が足りないのか考えてみると，まだ「切実感がない」のだと思った。

- 東海第二と福島第一の両方の見学に参加した。
  東海第二は再稼働に向けて工事をしていて，福島第一は廃炉に向けての工事を行っている。根本的に大きな違いがあると感じた。
  課題については，まずは避難経路が確立されていないこと。反対することが目的になっている反対意見や，「避難計画を立てるのは再稼働したいからだろう」といった意見が出てくるなど，様々な経緯があるとは思うが，まずは何かあったときのための避難経路を確立しておくべき。

コーディネーターによる「協議①」の振り返り

- 東海第二発電所との共生はできているが，原発の必要性や安全性などについて住民の中での議論がしにくい。

- 福島の帰還困難区域のようなことになる可能性はゼロではない。

いかに正しく恐れるか。自分に知識をつけて，自分で判断する。

- 自分で考えることで，「賛成でも反対でもない人」を減らしていく。そのために情報を受け入れて，「自分ごと」にしていくことが必要。
- 自分ごと化会議のような場に参加することで，以前より関心を持てたが，まだ切実感を持って考えることが出来ていない。
- 東海村に対するイメージが住む前と後で変化があった。来る前は「原発のまち」のイメージだった。
- 「原子力」に対する一般的なイメージはネガティブだ。このネガティブなイメージを変えていくことが必要。
- 原発への依存が高すぎるのではないか。農業等を切り口に依存度を下げていくことも必要ではないか。
- ALPS 処理水のように，実際よりもネガティブな報道が多い。これは東海第二発電所にも同じことが言えるのではないか。自分の知識をつけて判断できるようにしていくことが必要。

伊藤：原発に対して賛成する人，反対する人，どちらでもない人がいる。
「どちらでもない人」の中には，「考えていない人」と「考えているが判断できない人」がいる。まずは，「考えていない人」をどれだけ「考えているが判断できない人」に持ってこれるかが大切ではないかと思う。皆さんはどう思うか？

- 東海第二があることによって良いことと悪いことがあるのだとは思うが，判断材料が足りない。
  東海第二があることで自分に嫌なことがあったか考えてみたら，友人に看板を指さされて笑われたことがあり，恥ずかしく思ったことがあるくらい。
  高校生までは医療費が無料なことや，インフラが整備されていることなどは，良いことだと思う。
  自分の中で良いことと悪いことの判断がはっきりとつかない。賛成なのか，反対なのかということはこれまで考えていなかったし，今東海第二そのものの課題について考えているが悩んでいる。

切実感と危機感

- 他の方から「切実感」というキーワードが出た。言い換えれば危機感だと思う。危機感があれば，皆何とかしようと思うのだと思う。

伊藤：「危機感を持った方が良い」とした場合に，個人が知識を得たり，体験したりすることが危機感を持つ手段なのか，又は他の手段があるのだろうか？

- 自分の生活に直接関わっていないものに「危機感を持て」と言ってもなかなか難しい。

「あと 10 年先に村の財政が持たなくなる」など，自らの生活に影響が出るような状況にならないと危機感は持てないと思う。

- 「危機感」とは何に対する危機感なのか？原発の安全性に対する危機感なのか，自分の生活の基盤・経済面での危機感なのか？
- まずは村の財政だと思っている。今の医療費無料などのサービスレベルの低下が見えてこないと危機感は持てないだろう。
- 原発があることに対して，もっと危機感を持った方が良いのではないか。
  「無関心が課題」という意見は納得した。今日のテーマを最初に受け取ったとき，なかなか思いつかなかった。自身も無関心だったと気付かされた。
  情報発信が安心を作っている。反面，余計な不安を煽ることにも繋がっていると思う。
  地震があったときに速報で「原発は安全です。」と言われて，良かったと安心する一方で，不安感を煽られネガティブなイメージを持つ方もいると思うので，何も言わない方が良いイメージに繋がっていくということもあるのではないか。
  少し危機感を持つのは重要だと思うが，いたずらに不安を煽り，皆が毎日おびえて暮らすのも良くない。バランスが重要。
- 地域の課題は，「この地域はこういう風になりたいんだ」ということが定まった上で，明確にできるのだと思う。そうでないと，あれが足りない，これが足りないという意見がモグラ叩きのようにいくつも挙がって来てしまって，根本的な所にたどり着かないのではないか。

伊藤：ゴールが定まっていて，全員がそこに向かって何かを考えるのが理想ではある。ただ，そのためには「東海第二発電所」をどうするかを決めなければいけない。自分ごと化会議では賛成・反対ではなく，「自分はどうありたいか」を議論している。議論をする中で他の方の話を聞いて捉え方が変わる方もいると思う。なので、目指す姿を明確に決めるのではなく「自分がどうありたいか」を参加者の中で考えていただき，それを最後に提案書という形にして，次回会議の中で共有したいと考えている。

原発の安全性

- 私が思った地域課題は，避難を想定したまちづくりがされていないこと。原発の「安全神話」が足かせになっているのではないか。原発を造るとき，「安全だ」と言って誘致したのだと思う。それが足かせになり「避難を前提としたまちづくりをしましょう」とは言えなかったのでは。
  原発にはリスクがあることを村民に理解してもらって，危険であることを前提にまちづくりをすれば何か変わるのではないか。
  例えば改善提案の中に，特別な避難経路や高速道路への避難ルート接続，避難シェルターがあったが，確かにあってもいいと思うのに，無かったのは安全神話を崩すわけにはいかないという何かがあるのではないかと思う。

伊藤：「安全神話」は今でもあるのか，それともないのか。行政の方から意見を伺いたい。

山田村長：「安全神話」はない。安全に終わりはなく，原子力防災は村の責務である。事業者に対しても安全を何よりも優先することを繰り返し伝えており，職員にも徹底している。

村が情報提供するときは，先入観やあやふやなことを言わずに，主観が入ってもいけないと思っている。あくまでも事実をちゃんと伝える。事業者からの情報としては，村としての出し方は結構難しいところがある。一方，メディアは色々な情報を全て我先にと素早く伝えている。村としては正しい情報をいかに早く出せるか。これが一番の課題だと思っている。

- 「安全神話」という思想がないことは分かったが，東海第二ができた当初はどうだったのか？電力会社からは安全だという説明があったのだと思うが，当時の行政はどう説明したのか。

山田村長：誘致した当時の話は，分からないところもあるが，当時は研究所も発電所も初めてのことであり前例もない。そういう動きの中で受け入れていたのだと思う。それが「安全神話」に繋がっていたのかも知れないが，その後，事故やトラブルが発生したことで皆の知見が高まり，冷静に見られるように変化していったのではないかと思っている。

- 村は住民に対して，原発は危険だと言えるのか？それとも安全だと言うのか？

山田村長：安全だとは言えない。現在，原子力施設では，福島第一の事故を踏まえ，安全性を向上するための工事をしている。安全対策工事ではなくて，安全性向上と言葉を使い分けて言っており，村としてもそこはきちんと見極めた上で対応している。

- 「福島第一の事故は，今となっては防げる事故で，ある意味人災だった。」と言われていることから，福島第一の見学時に，なぜ東京電力ほどの会社が事故を防げなかったのか質問した。

  すると説明者からは「原発を作るときは，『安全だ』と言い切って作った。もし何か問題点が見つかったとしても，改善しようとすると『安全だと聞いていたから認めたのにおかしいじゃないか』と，地域住民やメディアから非難を浴びるのが嫌だったのかも知れません。」と回答された。だから村長に安全について質問をした。今の行政にはそうした意識はないということで良いか？

山田村長：そのとおり。

伊藤：今の議論は原発だけでなく，あらゆることに共通する話ではないか。今まで言っていたことが，壊れる恐れがあるというときに「だからこの議論はしないようにしよう」という考えは良くない。あらゆることを考えておく必要がある。

原発に関する情報発信のあり方

- 賛成・反対の二極ではなく，歩み寄りの議論ができると良い。
  全面賛成・全面反対の二極のどちらかに寄る話ではなく，他のエネルギーも考え，石油不足や気候変動による影響を考慮して議論すべきではないか。これは生活の上での危機感にも繋がる。
- 原発が近くにあるのに，原発に対する認識が低いように感じる。
  この状況が変わらないと，安全対策や避難計画に対して住民目線の意見が出てこない。一人一人の認知度を上げることで問題点ももっと出せるのではないか。
- 妻は福島県の大熊町出身。福島第一の事故を機に，妻の両親は故郷を離れた。今はもう周辺地域に戻った人もいるが，避難を転機に新たな暮らしをしている人もいる。故郷を離れた妻の両親は，「かわいそう」というわけではない。そのような考えの人もいる。
- 東海第二の安全の話についてだが，私は東日本大震災のときは東海第二で勤めていた。東海第二はあの地震を受けても耐えられている。一部の機器で破損したものもあったものの，修理すれば問題なく再稼働できるものだと思っていた。東海第二は災害に耐えられる設計をしており，実際に耐えられた。
- 情報発信についてだが，会社の教育で「JCO 臨界事故では放射能は漏れたか？」という問題を出しているが，半数近くが分かっていない。これは情報が正しく伝えらえれていない例だと思う。正しい情報を伝えないと，風評被害が増える。黙っていると声の大きい方々に負けてしまうので，行政は正確な情報をしっかりと発信していって欲しい。
- 電力会社が地域との融和を取れているかどうかは重要なことだ。私は，東海第二は地域との融和ができていると思っている。
- 私は，東海第二が抱える課題は「不安」だと考えている。
  震度 3 以上の地震が起こったとき，発電所には問題がありませんというニュースが流れる。全国の人々の不安を解消するための動きでもありつつも，同時に不安をあおっている側面もあると思う。

■協議②：私にとって，東海第二発電所そのものが抱える課題は何だろう？

東海第二発電所の設備や人材

- 東海第二は古い。新しい世代の原子炉にした方が良いのではないか。
  また，レベルの高い技術者がいるのか疑問である。不測の事態が起きたときに対応が取れる技術者がいるといいなと思う。
- 設備の老朽化と人材育成は，どこの会社だろうと同じ。部分的に修繕していくのか，全体的に一新するのか，天秤にかけながら選択していく。東海第二もそれは同様で，様々な要素を天秤にかけながら対処していく必要がある。

- 危機管理について，東海第二は老朽化しているものの，基準が見直されたことで耐用年数が延長されて，今再稼働に向けた準備をしている。「安全神話」の話があったが，原発についてあまり考えていない人々も，何となく安全ではないという認識をしている人が大多数だと思う。。
- 事業者（日本原電）は地域との信頼関係をさらに強くしていくことが重要。
- 日本原電（日本原子力発電株式会社）ができた背景は，日本における原発の先駆けとするべく，９つの電力会社がそれぞれ金を持ち寄って作られたと聞いている。

川又：（東海村 原子力防災安全課長）
日本原電は，全国の９電力の共同出資によって作られた会社であると聞いており，原子力発電の専業会社と認識している。

- 一番心配なのが，10 年くらい動かしていない物をまた動かすということ。
機器装置もそうだが，10 年の間でいなくなっている人材も課題だと思う。
- 大手の原子力関連メーカーから「10 年動かさないと本当にまずい」と聞いたことがある。人材の面で見ても，稼働していた当時を知っている技術者は減っており，新たに雇用された若い技術者たちはマニュアルに書いてある知識は知っていても，実際に稼働しているところを知らない。
- 「信頼関係」という話があった。私もこれは重要だと思う。放射線は目に見えないので怖い。目に見えないものだから正しい情報を提供してもらえる信頼関係が重要だ。

伊藤：目に見えない恐怖という話があった。目に見えないものだからこそ，事業者や行政は正確な事実を伝え，住民も自分たちで情報を受けとることが重要ということだと思う。

- 東海第二が再稼働するのであれば，東海第二の技術者たちは，現在も稼働中の原発に出向いて，稼働している原発を取り扱う感覚を取り戻すことも必要ではないか。
- 稼働していない機器については，稼働前に分解・点検を行っていく，ただし人材の面では，東日本大震災後，作業員が３割減っているという事実があり，これは課題だ。
- 福島第一も東海第二も Google マップなどの衛星写真で詳細に見ることができる。セキュリティ面での不安があるので，スクランブルをかけられないのだろうか。

伊藤：私の認識では安全基準が改定されたあと，テロ対策は非常に重要であるため，敷地内にどのような施設があるか，案内や目印は一切無くしている。

- おそらく衛星は何千基と上がっているはず。そうしたものを想定して安全対策をされているとは思う。見えてもいいように作っているのだと思う。
- 私も数日前に Google マップ福島第一を見てみた。ニーズがあるのかかなり詳細に見えているので不思議に思った。
- テロ対策については，事業者も具体的な対策内容は言えないと思う。世の中に出回っている情報は逆に怪しいのではないか。

コーディネーターによる「協議②」の振り返り

- 原発に賛成する人，反対をする人，どちらでもない人がいる。
  「どちらでもない人」の中には,「考えているが判断できない人」と「考えていない人」がいる。今後は、賛成か反対かまでいかなくても「考えていない人」をどれだけ減らせるかが重要になる。
- 原発について考えるための判断材料がまだまだ足りない。これを解決するためには，行政がいかに「正しい情報」を「早く伝える」ことが重要だ。しかし，行政だけの力では難しい面がある。個人個人が知識をつけ，考える努力も必要となる。
- 切実感・危機感を持つことで，個人が関心を持つことに繋がる。
- 切実感・危機感を持つためには，村の財政に対しての危機感，エネルギー問題を切実に思うこと，原発があるということに対する危機感など。ただし，無用に不安を煽らないことも必要。
- 自分ごと化会議中は危機感を持って考えることができるが，日々の生活に戻れば日々に忙しく考えられなくなるだろう。原発について考えるための「必然」をどう作るかが必要だ。
- 安全面・リスクの観点では，リスクを前提としたまちづくりを考えていかなければならない。
- 過去に「原発安全神話」があったのかもしれないが，今はない。安全対策工事も安全性を向上するための工事であり，この工事を終えれば 100%安全ということではない。
- 東海第二は古い。建て替える必要もあるかも知れない。再稼働したとしても 20 年後には廃炉になる。だから無くなっていくことを前提にまちのことを考えなければならない。
- 10 年もの長期間にわたって稼働していない。再稼働したときにトラブルが発生するのではないか。
  機器は稼働前に総点検を行うことで解消をしようとしているが，人材面では課題がある。ベテランの技術者がこの間に退職をしている他，東日本大震災後に 3 割の職員が減っているという事実がある。若い技術者を他の稼働中の原発で研修させるなどの対策が必要ではないか。

■協議③：どうすればみんなで議論できるのか？

伊藤：休憩中,「賛成・反対の結論を持っていなければ駄目だという話ではない」という話をしている方がいた。賛成・反対ではない「どちらでもない人」が考えることが大切なのだということを，改めて感じた。また，これまでの議論，アンケート，改善提案の中

にも「このような議論を出来る場がない」という意見があった。追加テーマとして,「どうすればみんなで議論できるのか」を考えたい。

- 話し合いの場が，賛成の人だけ・反対の人だけの集まりはよくあるのだと思うが，自分ごと化会議は違う。賛成も反対もひっくるめて皆で議論できる。
  この場のように賛成も反対も乗り越えて皆で話し合える場が，もっとあったら良いと思う。

- 以前，チェルノブイリの事故を題材にした劇に参加した。私は原発に賛成でも反対でもなく，事故が起こったらどのようになるか，リスクを負って上でその中で生活していることを考えて欲しいという思いで参加した。それなのに，完全に原発反対派と見なされてしまったことがあった。

伊藤：レッテル貼りになってしまうことがある。賛成か反対かの色分けをして，単純化したがる人がいる。報道の仕方もそうなりがち。しかし,「どちらでもない人」は圧倒的に多く，単純に色分けはできないのだと思う。

- 「みんな」とは誰を指していて,「議論」とは何かを決定するための議論なのか？

伊藤：「みんな」は東海村の村民の皆さん。「議論」は，賛成か反対かの決定ということではない。しかし，議論で生まれた提案は，参加した方の合意を取れるものにしたい。

東海村の住民が 10 人だったら，10 人集まって議論はできる。しかし，東海村には 3 万人を超える住民がいる。全員で議論をし合うのは現実的でない。だからこそ，この自分ごと化会議のように，無作為抽出で集まった住民が語り合う場がある。それがこの場の意義だと考えている。

- 「肩書」がない状態で議論することで，自由な意見が生まれると思う。
  もし肩書があったら，例えば原子力関係の方が話すと，原子力関係者の代表意見として取り上げられてしまったり，それなりに地位の方の発言が，政治的な発言と捉えられてしまうこともある。自分ごと化会議の中では，そういう不自由さは感じていない。

- トランジション・タウンの代表の方に話を聞く機会があった。郷土愛はどうやって育つのか聞いたところ,「地域のことに関わっていくことだ」と言われた。個人が地域に関わることで,「こんなことをやりたい」という意見が生まれていく。
  いきなり「原発に対してどう思うか」をテーマに参加する人を募集すると，賛成・反対どちらかの人たちが多くなる。そうではない，例えば教育や幼稚園のあり方について意見を話し合える場がもっとあってもいいのではないか。最初は 2 ～ 3 人でも，将来的にもっと多くの人が集まってくれる場になってくれるのではないかと思う。

伊藤：その場は，行政が主催するべきなのか。それとも住民や企業でやっていく方が良いのか。

- 行政はお金を出して場所を貸してもらうだけで良い。そこにコーディネーターやファシリテーターとして伊藤氏が来てくれれば良いと思う。

- 私も自分ごと化会議のような場があると良いと思う。
  だが PR が足りず，自分ごと化会議を開催していることを知っている村民は少ないのではないか。
- 賛成・反対の極論だけにならないよう，中立となる誰かが主催して欲しいので，行政主催が良いと思う。
- 「原発」はテーマが大きく，エネルギー・環境・経済・安全保障などで賛成・反対に分かれてしまうこともあるだろうことから，非常に難しいテーマだと思う。
  この会議の場が，どんな意味を持つのか？と考えている。専門的な知見を持っていない人々が話し合って真理にたどり着くのかが分からない。
  だけど，自分ごと化会議のような場で議論することは，建設的であるし，良いことだと思っている。

伊藤：この会議は，無作為で選ばれて参加してくれている方々の意見を「民意」として総意的に扱う目的ではない。無作為で集まった方の意見を民意として，その場で結論を出しそれを政策に反映する国もあるが，そのような場合は性別・年齢・職種を加味して集めている。自分ごと化会議においてはそのやり方とは異なっていることを補足させていただく。

- 賛成・反対の二項対立になっている議論の場に参加したことがあるが，その中で聞くに堪えない汚い言葉での非難があった。かと言って，賛成・反対のどちらかの人たちだけが，好きな人同士だけで集まっていても次に進まない。
  自分ごと化会議のように，無作為で集まって二項対立の状態ではなく，賛成・反対・どちらでもない人たちが議論できる場がもっとあれば，皆がそれぞれ考えるきっかけになるので良い。主催は中立である必要があるので，行政が主催で行って欲しい。
  原発の再稼働の是非を決めるときには，決める人を民意で選ぶ必要があると思っている。皆が議論する場があれば，是非を決める人を選ぶために考えるきっかけになる。
- 自分ごと化会議のような話し合いの場を個人が立ち上げるのは難しいので，行政が主催でこうした場を開いて欲しい。また，行政と住民が自分ごと化会議のようにテーマを決めて，話し合う場も必要だと思う。
- 議論テーマにもよるが，「原発関係」については行政主催が良いと思う。
  ただ，近しい人と話す井戸端会議では，より自分の考えを伝えやすいので，色んな所の井戸端会議から出た意見を，集めて表に出せる仕組みがあったら，もっと皆が何を考えているのか，分かるようになるのではないかなとも思った。

伊藤：自分ごと化会議が，近しい・話しやすい人との意見交換の結果を表に出す仕組みの一部になっているかもしれない。以前の会議で家族や知人と話をした結果の意見を述べてくれた方もいる。

- ゆくゆくは，松江市のように東海村も自分たち住民で開催できるようになれば良いと

思った。今まで構想日本が関わった中で，住民主催と行政主催の割合はどれほどか？

- 伊藤：住民主催は松江市のみで，他は全て行政主催。

コーディネーターによる「協議③」の振り返り

- 今までは賛成・反対の人だけの議論ばかりだった。自分ごと化会議は賛成・反対・どちらでもない人みんなで議論ができている。
- 結論を出す場であれば議論の仕方も変わるし，対立することも必要になると思うが，それよりも大事なのはもっと「考える場」をつくること。
- 主催者は行政が良い。ただし，行政が場を仕切ってしまうと，行政の審議会のような場になってしまいかねないので，今回の自分ごと化会議のように，行政ではない第三者が企画・運営をしていく方が良い。
- 原発以外のことも話し合うことで，住民同士が話し合い，考えることのできる村になっていく。

■総括

伊藤：東海第二があることによる地域課題と，東海第二そのものが抱える課題という協議テーマは，自分ごと化会議の冒頭では意見を出しにくいテーマだと思い，ここまでテーマにしていなかった。第１回から第３回にかけて，皆さんが自分の考えを話してくれていたことから，アンケート結果も鑑みて，今回のテーマを設定した。

「自分ごと化会議のように，話しにくいことも話せる場があった方が良い」という話が終盤にあったが，そのとおりだと思う。

次回に向けて，これまで議論し，提案いただいた内容を提案書にまとめておく。次回はこれまで話し合った内容を集約する場となる。引き続きよろしくお願いします。

山田村長：白熱した議論で素晴らしかった。回を重ねるごとに色々な意見が出てきている。今回は非常に難しいテーマで，どのような会議になるのか心配もあったが，これだけ色々な意見が出たことは，これまでの自分ごと化会議の成果だと思っている。

次回の第 5 回で締め括りとなることをもったいないと感じている。しかし，ただ長く続ければ良いというものではないので一つの区切りとしたい。

私は，自分ごと化会議は成功していると思っている。「原発」というテーマは，単体では行政で取り扱うことは難しいが，こうして議論の場をつくることは行政にもできる。この手法を原発だけでなく，子育てや環境問題などでも，住民の生活から出ている意見を吸い上げ，どのようなまちづくりをしていくかということはあるべきだと思っている

こうして会議に参加していることで，皆さんの意見を直接聞き，勉強できている。今後も何かしらの形で皆さんには関わりを持ち続けていただきたいと思っている。次回も

素晴らしい話し合いとなることを期待している。